

IV. 事業実績の具体的内容

〈運 営〉

IV-1. 事業体制の継続

1. 学内基盤の継続

杏林 AP 推進委員会の設置

平成 26 年度から継続して、本学に高大接続事業を推進するため、「大学教育再生加速プログラム (AP) 推進委員会 (通称「杏林 AP 推進委員会」) を設置している。この委員会は学長を委員長とし、以下、各学部長、高大接続推進室長、学園事務局長らの教職員で構成され、事業活動の遂行状況の把握、事業計画・活動の点検評価、その他高大接続事業に関する業務を司っている。

高大接続推進室と高大接続推進委員会の設置

平成 26 年度から継続して、高等学校・教育団体等との効果的な高大接続のための調査・企画・連携を推進することにより、高等学校と杏林大学の教育内容、教育方法、学習成果、入学選抜、単位認定等の接続・連携を行うことを目的として高大接続推進室を設置し、その中に高大接続推進委員会を組織した。この委員会は室長を委員長とし、各学部からの教育職員と大学事務部長らの事務職員で組織され、推進室運営に関わる基本的事項の審議および各学部間の調整を図っており、事務局を地域交流課 (高大接続推進担当) に開設している。

2. 委員会と組織との連携

AP 推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続

平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月、AP 推進委員会、高大接続推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続し、2 委員会と 2 組織の情報共有の促進、協力体制の強化、プログラムの調整をより綿密に行ったことに加え、キャンパス移転を通じて 4 学部のスムーズな連携が可能になったことで、AP 補助事業の全学的な波及に結びついた。

その成果として、本補助事業で定期的に行っている事業項目以外にも、総合政策学部教員による順天高等学校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学校看護学研究室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援、さらに、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」における総合政策学部教員の担当科目の開講など、他学部教員と高校との連携機会の拡大にも結びついた。

＜高大接続＞

IV-2. 「杏林 AP ラウンドテーブル」の開催

開催日：第12回 杏林 AP ラウンドテーブル 平成30年5月21日

第13回 杏林 AP ラウンドテーブル 平成30年11月19日

目的

「杏林 AP ラウンドテーブル」は、連携高校関係者と杏林大学が高等学校から大学までの人材育成について意見交換をする場として、本事業の中核的会議として位置づけられる。これまで高等学校と大学の関係は入学試験のみが接点となる場合がほとんどであったが、今後社会で求められるグローバルな視野と行動力、語学力をもつ人材を育成するため、「杏林 AP ラウンドテーブル」を通じて、教育活動や課外活動、そして教育・学習評価方法等について高等学校側と大学が意見を交換し、お互いのリソースを活用するためのプログラム内容について協議することを目的としている。

内容・実績

第12回「杏林 AP ラウンドテーブル」

開催日：平成30年5月21日（月）18:00～

参加高校：聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、大成高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、日出学園高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、藤村女子高等学校、都立調布南高等学校、都立府中東高等学校、都立杉並総合高等学校（計13校）

開催場所：杏林大学井の頭キャンパス5階会議室

平成30年5月21日、第12回「杏林 AP ラウンドテーブル」が、杏林大学井の頭キャンパス5階会議室で開催された。第12回目となる本会議には計13校から18人の校長、副校長、進路指導担当教員、国際教育担当教員らが出席し、活発な意見交換を行った。

1. 報告事項

大瀧純一学長の挨拶より始まり、小学校・中学校の教育が大きく変わる中で、高校と大学はこれから大きく変わっていかねばならない状況にあり、こうした意見交換の場は重要であると述べた後に、各担当より新たに参加した高校教員の紹介、中間評

価のA評価、29年度末に実施した日英中とトライリンガルキャンプ、IELTS受検等の報告が行われた。

2. 学修イベント

その後、今年度の高校生向け各種の学修イベントの予定が説明された。この学修イベントには平成30年度のライティングセミナー、高校と大学をつなぐFD/SD、英語キャンプ、中国語研修、大学教養レベル夏季集中講座（今年から保健学系も開講）、英語・中国語プレゼンコンテスト、IELTS対策講座、アドバンスト・プレイメントが含まれる。それぞれの趣旨や概要などの説明を行い高等学校からの意見を伺った。

3. 意見交換

まず、アドバンスト・プレイスメントの高校生・保護者向けの説明会を開けば参加者も増えるのではないかとの意見で、各種の学修イベントとセットでPRに力を入れていくことが確認できた。また、APの科目数が多いことが良いのかとの意見があり、高校生がほんとは参加したくなるような少数の科目に絞って多くの高校生を集めることでも良いのではないかと、との意見が挙げられた。姉妹校の大学との間で、高校生の単位認定をしている高校からは、高校生が何を求めているかを考え「テーピング」についての大学の授業に、医療やスポーツなどに興味を持つ高校生が多く集まったとの意見がある一方、大学

での学修に参加したことを高校側の単位として認めることを、制度の中で考えていく必要もあるのではないかと、との意見があった。

次に、夏季集中講座などに参加した高校生の学修評価をしてもらえるのか、との質問があった。その理由としては今後、高校の調査書（ポートフォリオ）が変わり、高校生が3年間の積み上げで、こうした校外学習などを自己申告して記載できるようになる。その際に、評価がしっかりしていることが重要という背景が述べられた。これに対し、大学生に単位を与える学習機会に関しては、同様の評価が可能だろうとの回答を行った。

第13回「杏林APラウンドテーブル」

開催日：平成30年11月19日 18:00～

参加高校：大成高等学校、関東国際高等学校、聖徳学園高等学校、順天高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、都立武蔵村山高等学校、日出学園高等学校、都立羽村高等学校、藤村女子高等学校、都立調布南高等学校、都立府中東高等学校、都立杉並総合高等学校、神奈川県立横浜清陵高等学校、工学院大学附属高等学校（計15校）

開催場所：杏林大学井の頭キャンパス5階会議室

平成30年11月19日、第13回杏林APラウンドテーブルが井の頭キャンパスで開催された。今回は15高校から22人の校長、副校長、進路指導担当教諭らが参加し、活発な意見交換がなされた。

1. 学修イベント（報告）

大瀧純一学長挨拶のあと、稲垣大輔室長から今年度に既に実施してきたアドバンスト・プレイスメント（夏季集中科目等を含む）やFD/SD、英語キャンプ、中国語研修、英語プレゼンコンテスト、ライティングセミナーなどの報告を行った。そして、Jason Somerville 特任講師からはライティングセンターの活動報告を行った。さらに、今後のIELTS対策講座(2月)や日英中トライリンガルキャンプ(3月)の告知や、来年度のアドバンスト・プレイスメントの予定などの各種イベントに関する報告があった。

2. 意見交換

その後、意見交換に入り、今回は、高大接続・入試改革に対する高校側の対応について、15校からその状況を伺った。杏林大学としても非常に役立ったとともに、他の高校の取り組みを知るうえで、高校間の情報交換にも寄与できた。主に話が上がったテーマを以下に挙げる。

- ・英語4技能の強化や、英検、TEAP、GTEC、ケンブリッジ英検、TOIEC、IELTSなどの受検を課している。
- ・国語は記述式の授業を展開している。
- ・ポートフォリオ対応としてのClassi導入。
- ・アクティブラーニングとルーブリックの活用。
- ・2020入試改革への対応

その後、「共通テスト＋英語検定試験＋数学必須」やアドミッションオフィサーについての意見交換がなされ、最後はスノードン国際交流センター長の挨拶で閉会となった。

//// 効果・成果 //////////////////////////////////////

第12回杏林APラウンドテーブルにおいては、アドバンスト・プレースメントの高校生・保護者向けの説明会を開けば参加者も増えるのではないかとの示唆を受け、各種の学修イベントとセットでPRに力を入れていくことを確認した。また、APの科目数が多いことが良いのかとの意見があり、高校生がほんとに参加したくなるような少数の科目に絞って多くの高校生を集めることでも良いのではないかとの意見があり、次年度の科目選定に配慮することになった。さらに、夏季集中講座などに参加した高校生の学修評価をしてもらえるのかとの質問があり、今後、高校の調査書（ポートフォリオ）が変わり、こうした校外学習などを自己申告して記載していけるようになるにあたり、評価がしっかりしていることが重要となることを踏まえ、高校生に単位を与える学習機会に関しては、大学生と同基準で評価することを確認した。

第13回杏林APラウンドテーブルにおいては、高大接続・入試改革に対する高校側の対応についての情報を得た。英語4技能の強化や、英検、TEAP、GTEC、ケンブリッジ英検、TOIEC、IELTSなどの受検を課している。ポートフォリオ対応として、多くの高校でClassiを導入または検討している。アクティブラーニングを積極的に行い、50分授業の内、教員が話をするのは20分以下にしようと試みている。新学習指導要領の研究・研修を学校全体として行おうとしているが、教員間の温度差がある。学力観が変わる中で、どのような人材を育ててゆくのかという根本を教員が共有してゆくことが重要である。探究的学習や課題研究については、総合高校のほうに実績があるが、杏林大学を含め大学での実験などを活用している。ただ、若い教員の中には、自身の卒論経験がない人もいて、指導が困難になる場合もある。調査書やポートフォリオの入試での大学側の活用の方針が良く見えないのは問題である。共通テストを受ける一般入試より、現在の指定校推薦、公募推薦、AOで受験する生徒が多いので、多様な進路選択をする生徒に対して入試改革に対応するのが大変である、などの貴重な情報を得た。さらに、「大学のアドミッションポリシーが出てこないのが問題で、アドミッションオフィサーを置く個別の良い生徒を探してゆく入試に移行する気配がない」との指摘に対し本学学長は、「アドミッションポリシーは既にどの大学でも出しているが短い。杏林大学では高大接続の観点から、きめ細かい長い文章で書いており、状況に応じて修正もしている」と回答し、今後の取組に向けた建設的な意見交換ができた。



IV-3. 連携協定書の調印

平成30年度に新たに連携協定を締結した高等学校は以下のとおりである。
・都立調布南高等学校 東京都調布市
(協定期間：平成30年12月1日～令和元年11月30日以降、自動更新)

目的

高等学校とグローバル人材育成連携協定を締結し高大接続体制を整備・発展させてゆくことが、継続的な本事業の遂行の要となるため、杏林 AP ラウンドテーブルや日英中トライリンガルキャンプなどに参加する高校と連携協議を行い、連携協定を締結することで相互の教育に係る交流・連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図ることを目的とする。

内容・実績

杏林大学と都立調布南高等学校（東京都調布市）は、平成30年11月14日（水）、杏林大学において高大連携の協定書への調印を行った。

井の頭キャンパスC棟5階応接室で行われた調印式には、都立調布南高等学校から山崎 仁校長が、杏林大学からは大瀧純一学長、ポール・スノードン国際交流センター長、稲垣大輔高大接続推進室長が出席し、それぞれの代表として山崎校長、大瀧学長が協定書にサインし、和やかな雰囲気の中、今後も連携を深めていくことを確認した。

都立調布南高校は、「至誠、創造、力行」を建学の志に掲げ、英語教育に力を注いでおり、杏林 AP ラウンドテーブルにも以前より出席。現在、本学国際交流センター長が同校の学校運営連絡協議会委員になっており、また、本学の教員が出張講義等を頻繁に実施しており、今後さらに深い様々な高大連携を実施していくことで双方の同意が得られ、この協定締結に至った。協定では、「杏林大学と都立調布南高等学校が、相互の教育に係る交流・連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図るために、次のとおり協定を締結する」とし、以下の活動に取り組んでいくことにしている。

- (1) 大学の授業科目への特別聴講生の受け入れ
- (2) 大学の各種公開講座への聴講生の受け入れ
- (3) 大学教員による高校への出張講義
- (4) 教育についての情報交換及び交流
- (5) その他、双方が協議し同意した事項



IV-4. 高校と大学をつなぐFD / SD の開催

開催日：平成30年7月25日
講演者：早稲田大学 沖清豪教授
テーマ：「学生の変容からみた高大接続改革の意義と課題」
開催場所：杏林大学井の頭キャンパス

目的

FD/SDは大学の教育と運営に関し、今や必須のものとなっている。大学教職員が高校教育の現状に理解を深め、特に高校でのグローバル化に対応する教育や外部連携について高校側の取り組みを知ることで、杏林大学における「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業の推進の一助にする。

内容・実績

平成30年7月25日、杏林大学井の頭キャンパスで、「第5回高校と大学をつなぐFD/SD」が開催された。講師は、早稲田大学沖清豪教授で、同大の入学センター副センター長、入試開発オフィス長を務められた。演題は「学生の変容からみた高大接続改革の意義と課題」で、高校教員3名、杏林大学教職員84名が参加した。

まず、大瀧純一学長が、入試改革・高大接続改革の流れの中で、本学でも種々のことを大きく変えていきたい、との挨拶があり、稲垣大輔室長の司会で講演会の進行を行った。

沖清豪先生のご講演では、まず、入試・高大接続改革と学生との変容について、大綱化や女子学生の進学率、高卒新卒者の進学率、発達障害などの学生の多様化、保護者や社会・産業が期待する大学生像、等々の「卵と鶏」の関係から、話が始まった。

特に、文科省の制度で、すでに小学校と中学校の教育改革は、例えば英語教育やアクティブラーニングの導入などで、進み始めていることを指摘。一方、高校教育は、大学入試が現状のままであるからなかなか変えられないという高校側の意見と、送られてくる高校生の多様化・質的变化で大学教育がうまく機能しづらくなっているという大学側の意見が、ぶつかり合うことがあると述べられた。

そこで、高校教育と入試と大学教育を三位一体で改革するのが、最善の方法であろうということで、入試改革・高大接続改革が始まったが、文科省の想定、国公立大学の想定、私立大学の多様性、生徒・保護者のニーズが対立することもあり、簡単には進まない状況を説明される。特に、入試改革での選抜制度の変更は、大学から高校へのメッセージであり、学力の3要素を測る方法、英語4技能（民間試験）の導入、基礎学力テストと大学入学共通テストの利用方法、調査書変更やe-Portfolio導入による高校教員の負担などなど、数々の具体的論点について解説が行われ、英語民間試験についてはそのコストや、地方や離島での受験機会の問題なども今後の課題であると述べた。

また、入試日程や学生像の変化、CEFRに基づく英語4技能試験について指摘し、学力の3要素を評価するために、学力担保型のAO入試が中堅大学では求められていくのだろう、と結論が述べられた。

今回のご講演のなかで強調されていたことは、2年後の入試改革より、高校の新しい学習指導要領に対応して入試大綱が変わる6年後が、高大接続・入試改革の本丸であるという点であった。

最後に、質疑応答があり、スノードン国際交流センター長の挨拶で閉会となった。

効果・成果

入試改革での選抜制度の変更は、大学から高校へのメッセージであり、学力の3要素を測る方法、英語4技能（民間試験）の導入、基礎学力テストと大学入学共通テストの利用方法、調査書変更やe-Portfolio導入による高校教員の負担などなど、数々の具体的論点について解説が行われた。また学生の変容からみれば、M.トロウのエリート型学生、マス型学生、ユニバーサル型学生の3分類は、学生像の変化を言い当てており、それに対応して、国立大・高選抜性私大、中選抜性私大、低選抜性私大のそれぞれにおいて、基礎学力テストや大学入学共通テストの利用方法と科目数などを各大学が決めてゆくことになるという説明があった。そして、CEFRに基づく英語4技能試験は到達度を見る試験となり選抜には使えず、実質的には4教科による選抜と英語4技能の到達度で評価することになると指摘。その他学力の3要素を評価するために、学力担保型のAO入試が中堅大学では求められていくとの説明があり、今後の本学の入試改革に対して全学の教員が考える貴重な機会となった。



IV－5. 連携高等学校との意見交換

平成30年度も連携高等学校と多くの意見交換がなされ、全体で60件あまりとなった。その一部を取り上げ紹介する。

① AP事業について

対 応 日：平成30年4月12日

高 校 名：多摩大学日黒高等学校

高校関係者：松井晋作 高大接続委員長（高校）

大学関係者：晝間大郎課次長

主 な 話 題：杏林大学の高大接続全般について、説明した。

② 入試改革について

対 応 日：平成30年5月9日

高 校 名：関東国際高等学校

高校関係者：黒澤真爾副校長

大学関係者：岡田洋二教授

主 な 話 題：大学説明会に参加し、保健学部を中心とした入試情報の説明を行うと共に最近の入試改革状況についての意見交換を行った。

③ ポスターセッションについて

対 応 日：平成30年5月26日

高 校 名：横浜清陵高等学校

高校関係者：田中顕浩校長

大学関係者：晝間大郎課次長

主 な 話 題：10人の外国人枠高校生（主に中国人）の進路先として杏林大学を考えている。それに関して情報提供と意見交換を行った。また、ポートフォリオに関し、杏林大学の各種学修イベントについて紹介した。

④ AP事業について

対 応 日：平成30年6月8日

高 校 名：杉並総合高等学校

高校関係者：倉本武雄校長、川崎史子教諭

大学関係者：稲垣大輔 高大接続推進室長

主 な 話 題：杉並総合高校の課題探求について生徒2人と担当教諭との顔合わせをし、テーマ等について話し合った。

⑤ 連携協力関係について

対 応 日：平成 30 年 8 月 21 日

高 校 名：中村学園高等学校日本アドバンスト・プレイスメント協会

高校関係者：国際科科长 早川則男教諭

大学関係者：青柳貴徳副部長、晝間大郎課次長

主 な 話 題：アドバンスト・プレイスメントの今後の連携協力関係について話し合うと共に商標登録についての使用方法について相談をした。

⑥ AP 事業について

対 応 日：平成 30 年 10 月 3 日

高 校 名：調布南高等学校

大学関係者：阪本奈美子教授

主 な 話 題：阪本奈美子教授が調布南高校で出張講義を行い、先方と保健学についての大学教育について意見交換を行った。

⑦ IELTS 対策講座について

対 応 日：平成 31 年 2 月 9 日

高 校 名：相模原高等学校

高校関係者：林弘一教諭

大学関係者：青柳貴徳副部長

主 な 話 題：IELTS 対策講座の際に英語検定試験等についての意見交換を行った。

⑧ 英語教育について

対 応 日：平成 31 年 3 月 20 日

高 校 名：日の出学園高等学校

大学関係者：岩本和良教授、八木橋宏勇准教授

主 な 話 題：「幼小中高一貫英語教育」のプログラム開発・教材作成について「学校法人日出学園英語教育プログラム開発委員会委員」として参画し、言語学・英語教育学等の観点から助言を行った。

⑨ 中国語教育について

対 応 日：平成 31 年 2 月 27 日

高 校 名：金沢辰巳丘高等学校

高校関係者：助田清華教諭

大学関係者：宮首弘子教授

主 な 話 題：同時通訳ブース等国際交流関係の施設見学を行い、中国語教育について意見交換し、また入試情報についても提供した。

⑩ セミナー・ワークショップについて

対 応 日：平成 31 年 3 月 28 日

大 学 名：金沢大学

大学関係者：村井淳志人間社会学域長、福本知行准教授、

川合礼子人間社会学系事務部、

ポール・スノードン国際交流センター長、

稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳副部長、晝間大郎課次長

主 な 話 題：人文社会系の学問分野での高大接続の先行事例の調査のために本学を訪問。本学の行っている状況をお話しし、意見交換をした。

Kyorin Writing Center Activities

The objectives of the KWC were achieved by the following actions and activities which were accomplished during the 2018 - 2019 academic year.

Tutoring

Tutoring in the KWC was carried out on a one-to-one basis during the spring and autumn semesters. Sometimes groups of students were tutored together when they had a group presentation. Tutoring was carried out mainly by the PT with Mr. Somerville in a supervisory role. Usually students would make an appointment in advance. However, walk-ins were accepted when possible.

Peer Tutors

During the spring semester eleven PT from Japan and China worked in the KWC. This number decreased to ten PT in the autumn semester. During the spring semester for 2018 there were six new PT and for the autumn semester there were three new PT. After initial training PT were allowed to work with customers (students) usually tutoring. PT also helped prepare the KWC for open campus and writing seminars and also assisted in workshops. In addition to tutoring PT were asked to make posters and flyers and also conduct special drop-ins for IELTS writing practice.

Open Campus

The KWC was open for business for each of six open campus days and was staffed by at least two PT and Mr. Somerville. Three activities were created to allow high school students to experience university life at Kyorin. The three activities ranged in difficulty and were Postcard Writing, Report Writing, and Entrance Exam Writing. Students were encouraged and supported by the PT and given one-to-one help and feedback.

Students (and also parents) dropped in at various times throughout the day with each session usually lasting around 20 minutes. However, some students stayed for over an hour. In total the KWC served 57 students over the six days.

KWC Workshops

One workshop for university students was taught during the academic year in the KWC. The workshop was created to build upon and enhance regular lessons and was advertised, promoted and opens to all students. PT assisted when they were available.

The workshop was: Presentation Skills - three 90 minute lessons. See Statistics section. Additionally, another workshop (English Writing: The Paragraph) was created and advertised although no students attended.

Outreach Activities

During the academic year two Global AP Writing Seminars were held in the KWC on Saturday afternoon. The purpose was to give participating high school students a taste of university life and also a chance to work on activities not taught at high school level.

The spring Writing Seminar on EIKEN Writing Pre-2 took place on Saturday, June 9th, 2018. Two students participated in learning how to succeed in the EIKEN Writing test. Three KWC Peer Tutors attended the seminar and assisted the Director (Jason Somerville). The students were welcomed and then introduced to the elements of EIKEN Writing Pre-2. After that the students went on to learn about proper writing structure using an introduction, body and conclusion. The students were all given help and feedback with corrections and comments delivered by Mr. Somerville assisted by the PT. The BigPad was utilized in the seminar and was a helpful tool. By

the end of the seminar, the students had a firm grasp of how to write more academically and could gain confidence for passing the writing section of the EIKEN Pre-2

The second writing seminar brought together all three activities used in the open campus tutorials. All students completed Postcard Writing, Report Writing, and Entrance Exam Writing. They were given specialized help on how to structure their paragraphs academically with the 'hamburger paragraph' style introduced. Six high school students attended and were supported by three PT.

Mr. Somerville visited affiliated partner schools throughout the year as part of the Global AP Seminar. This was a great chance to take the services of the KWC to our partner high schools for the promotion of English and intercultural communication. The workshop (Mobile-assisted Language Learning - Smartphones to encourage greater student interaction) was taught and enjoyed by students as well as teachers. 16 students attended the Global AP Seminar.

Statistics

The following tables summarize data for the academic year 2018 - 2019.

Kyorin Writing Center

Number of individual tutoring sessions (cumulative number of students)

Spring term	150
Autumn term	<u>94</u>
Total	244

Number of students served

Spring term	91
Autumn term	<u>51</u>
Total	142

Number of visits per student and teacher

	1 visit	2-3 visits	4 or more visits
Spring term	55	30	6
Autumn term	28	19	4

Faculty from which students and teachers came to the KWC (session numbers)

	Foreign Studies	Social Science	Health Science	Medical
Spring term	106	20	20	0
Autumn term	84	2	1	0
	Adult Learning	Center for International Exchange		
Spring term	4	0		
Autumn term	6	1		

Students and teachers who visited the KWC, by year (session numbers)

	1 st	2 nd	3 rd	4 th	Graduate Adult Learners	Staff
Spring term	18	98	5	13	4	12
Autumn term	14	26	21	23	8	2

Note: workshop university students and writing seminar high school students are not included in the data above.

Outreach Activity - Kyorin University Students

Writing Seminar (class visits)	KWC Workshop
Practical English 1: 48 students (7/13/2018)	Presentation Skills: 3 students (11/21/2018, 11/28/2018 & 12/5/2018)
Practical English 2: 39 students (7/13/2018)	
Essay Writing 2: 21 students (10/23/2018)	
Essay Writing 2S: 26 students (10/23/2018)	KWC Special Seminar
Essay Writing 2: 21 students (10/23/2018)	Presentation Skills: 14 students (3/7/2019)
Essay Writing 2: 16 students (10/30/2018)	Total: 188 Kyorin University students

Total (KWC and Outreach Activity): 432 Kyorin University students

Outreach Activity - High School Students

Global AP Seminar (high school visits)	Writing Seminar: 6 students (11/17/2018)
Junten: 16 students (10/30/2018)	
	Open campus (in KWC)
Global AP Writing Seminar (in KWC)	57 students
Writing Seminar: 2 students (6/9/2018)	Total: 81 <u>high school</u> students

Kyorin Writing Center Outcomes

As no official data from research was carried out, it is difficult to determine the extent to which the tutoring that the students received in the KWC during the academic year 2018- 2019 improved student performance. However, from talking with students and teachers, the staff of the KWC (Mr. Somerville and PT) believes and surmises that students (and staff) have greatly benefitted from the KWC services, and hence the objectives of the KWC have been met.

Students

Students who visited the KWC received personalized, individual help from specially trained PT. The PT assisted the students in writing better, more focused, more structured essays. Some student brought in a paragraph or a presentation script, others brought in a five paragraph essay, but they all received ideas and advice on how to make their writing more academic and suitable for university standard. Students who entered under confident and lacking in written accuracy left with a sense of

accomplishment and belief that they could improve their writing. It is believed that students felt happier and more positive about learning English after visiting the KWC. After talking with teachers whose students received help and support from the KWC, teachers commented on how students' performance in homework, presentation (content) and grades improved. Several students were also asked if their visit to the KWC made a difference and they replied positively.

Staff

Not only students, but also staff members used the services of the KWC, from professors who needed help writing an academic paper to administration staff who needed help with emails and presentations. The feedback given was effective.

Peer Tutors

All PT for the academic year were new to the KWC, so initial training in two academic writing workshops really got them up to speed quick and gave them the confidence to be effective PT. Throughout the year PT have not only continued to learn and improve their academic writing, but improve their personal and social skills. Their 'customer service' has been honed over the year and they are now able to offer the benefits of improved English skill as well as assisting and satisfying students' needs. This was also evident in the PT helping high school students and putting them at ease. The PT helped to bridge the gap

between the teacher (Mr. Somerville) and the high school students and showed them how get the best out of their university experience. Some PT started in the KWC a little shy and overwhelmed, but have now transformed into confident and educated young adults whose performance in essays and assignments has vastly improved. During the year all PT have completed on-the-job training from an academic writing textbook and a common English errors textbook. The intercultural benefits between the Japanese and Chinese students really took off with a lot of new friendships forged. Exchanging ideas and talking about customs was a joy to witness. It is Mr. Somerville's belief that the PT have greatly benefitted from their time in the KWC.

Affiliated Partners

The connections between Kyorin University and our partner high schools has continued to strengthen, which is evident from the feedback given about the services of the KWC at the AP Round Table meeting. We are continuing to work together to better the English skill and intercultural communication of the high school students. By communicating with our high school partners new ideas for the next Global AP Writing Seminar have already been acted upon as the KWC works towards the needs of our customers. The building of relationships between the KWC and partner high schools is continuing into the next academic year with many principals and teachers keen to employ the services of the KWC.

Conclusion

Further development of activities of the KWC is continuing and plans are already continuing to get the best out of the resources available. It is hoped that the KWC will advance and go from strength to strength.

The continued cooperation between all Kyorin

staff to promote the services of the KWC is important for increasing student numbers. Support from all faculties is essential to the goals of the KWC. By encouraging students teachers can have a positive effect on the way the KWC functions.

Maintaining a dialog with our partner high

schools is important so that the KWC is able to offer not just events and activities for university students, but also tailor the needs of each high school to their students. Dialog through the AP Round Table meeting helps to maintain a stronger and more successful relationship between Kyorin University and its partners in equally shared goals.

The ongoing success of the KWC is an important aspect of Kyorin University's overall mission for the future. With sufficient backing the objectives of the KWC will progress and endure and university students, high school students, and Kyorin staff will reap the benefits of this valuable resource.



【Texas A&M 大学生がライティングセンターで学生やチュータと交流】



【高校生対象 英語ライティングセミナーを開催】



【高校生対象 英検対策ライティングセミナーを開催】



【米国研修に向かう保健学部学生にプレゼン・スキル・ワークショップを開催】



【オープンキャンパスにおいて、ライティングセンターで高校生が指導を受ける】

IV-7. アドバンスト・プレイスメントの実施と生徒募集

昨年度までに締結した大成高校、順天高校（SGH指定校）、神奈川総合高校、関東国際高校、聖徳学園高校、武蔵村山高校、調布南高校、府中東高校、藤村女子高校の9高校と「アドバンスト・プレイスメントに関する覚書」を継続維持し、学則・規定等を整え、医学部2科目、保健学部4科目、総合政策学部14科目、外国語学部36科目の春学期・秋学期合計56科目を対象科目としてアドバンスト・プレイスメントを継続実施した。

内容・実績

春学期開講科目の受講を希望する高校生履修登録者が0名となったため、急遽、夏季集中科目の開講を年度内に決定し、保健学部4科目（基礎生物学・基礎化学・基礎物理学・基礎数学）、総合政策学部1科目（近現代史と現代社会）、外国語学部1科目（目的別英語演習）を開講したところ、計114名の高校生が履修し、123単位がアドバンスト・プレイスメントとして認定された。

3月に実施された日英中トライリンガルキャンプには高校生29名が参加し、口語中国語の科目として29単位をアドバンスト・プレイスメントで認定した。本年度中にアドバンスト・プレイスメントで単位認定を受けた高校生は合計128名、認定された単位数は152単位となり、目標値50名、100単位を上回る結果となった。

桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した

単位がより多くの大学で単位認定される高校生にとってより有益な制度構築を図っており、本年度は複数の大学に働きかけを行っているが、先方の大学から正式な協定締結の回答を待っている状況である。

1. 高校生対象 夏季集中 アドバンスト・プレイスメント科目の開講

前半の平成30年8月13日から17日にかけて、高校生対象の夏季集中アドバンスト・プレイスメント科目を開講。科目Aは「近現代史と現代社会」（総合政策学部）、科目B:基礎生物学（保健学部）、科目C:基礎化学（保健学部）、科目D:基礎物理学（保健学部）、科目E:基礎数学（保健学部）が開講され、それぞれ3日間連続で高校生が大学レベルの授業を受講した。高校生の履修終了者数は、科目A（4人）、科目B（16人）、科目C（11人）、科目D（2人）、科目E（20人）と意欲的な高校生が多く参加。

後半の平成30年8月27日から30日にかけて、高校生対象の夏季集中アドバンスト・プレイスメント科目Fを開講。科目Fは「目的別英語演習」（外国語学部）。この授業は3人の英語の教員から、英検2級取得の目的に合わせた授業が行われ、高校生33人が熱心に受講した。

大学レベルの授業を受けた高校生の感想は「高校では教えてもらえない深いところまで教えてもらった（生物学）」、「習っていない範囲も理解できてうれしい（数学）」、「高校の授業との違いを知ることができて、より大学に進学したいと思った（生物学・数学）」、「正直に、『わからないです』といったら詳しく説明してもらえた（物理学）」などと、前向きな学習意欲に応えることができた。

2. 日本アドバンスト・プレイスメント推進協議会に参加

1. 研究会設置の背景

文部科学省は、初等中等教育のグローバル化を推進する施策の一環として、国際バカロレア (IB) 認定校を 200 校まで増やすことを目標と掲げている。国際バカロレアは、国際バカロレア機構が実施する教育プログラムで、高校レベルの「ディプロマ・プログラム」を修了すると、海外大学からも高く評価されるなど、グローバル人材の育成に大いに役立つ。しかしながら、IB の導入コストや、既存のカリキュラムとの親和性等の課題により、IB 導入に適した高校は限られている。

IB は、ヨーロッパの高校を中心に広く採用されているが、アメリカの高校では、一般のコースに加えてより高度な学習ができる AP (アドバンスト・プレイスメント) のコースを併設するのが主流となっている。AP は、科目単位で導入できるなど柔軟性が高く、IB と比べると低コストで導入できることが特徴である。AP は、アメリカの大学だけでなく、IB が主流のヨーロッパの大学においても、その価値が認められていることから、IB と併存するプログラムとして検討する価値がある。

2. 第2回研究会の概要

会名: AP プログラム導入研究会 第2回研究会

主催: 日本アドバンスト・プレイスメント推進協議会、ライトハウス

後援: 京都大学 学際融合教育研究センター 地域連携教育研究推進ユニット

日時: 2018 年 8 月 25 日 (土) 14 時 00 分～16 時 30 分

会場: 中村中学校・高等学校 (東京都江東区清澄 2-3-15)

会次第および講演者 (敬称略):

14:00～14:10 開会の挨拶

日本アドバンスト・プレイスメント推進協議会 代表理事
中村中学校・高等学校校長 永井 哲明

14:10～15:00 特別講演 (1) アジアにおける AP プログラムの将来性と
カレッジボードの取り組み

カレッジボード エグゼクティブ・ディレクター 東アジア担当
ソニー・リム

15:00～15:25 特別講演 (2) 高大接続と AP プログラムへの期待

文部科学省高等教育局大学振興課 改革支援第二係長
河本 達毅

15:25～15:40 研究報告 高大接続における早期履修制度の類型

—Advanced Placement と類似制度—

京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程 西川 潤

5. 第2回研究会参加団体一覧

APプログラム導入研究会 第2回研究会参加団体リスト(順不同)

団体名	所在地
工学院大学附属中学高等学校	東京都 八王子市中野町 2647-2
中村中学校・高等学校	東京都 江東区清澄 2-3-15
広尾学園中学校高等学校	東京都 港区南麻布 5-1-14
三田国際学園中学校・高等学校	東京都 世田谷区用賀 2-16-1
栄光学園高等学校	神奈川県 鎌倉市玉縄 4-1-1
聖パウロ学園光泉中学・高等学校	滋賀県 草津市野路町 176
近畿大学附属高等学校	大阪府 東大阪市若江西新町 5-3-1
杏林大学	東京都 三鷹市下連雀 5-4-1
上智大学	東京都 千代田区紀尾井町 7-1
TCK Workshop	東京都 千代田区丸の内 1丁目新丸ビル 10F
Lighthouse Group	U.S.A. 2958 Columbia St. Torrance, CA 90503



//// 効果・成果 //////////////////////////////////////

全学的アドバンスト・プレイスメントによって、大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。これは高校生にとって自分の進路を決めるきっかけとなるだけでなく、大学進学後に修得すべき単位が先取りできるようになり、大学での学修がより深く実質的なものに行えるようになった。さらには将来的には本事業の目的でもあるグローバル人材育成のための留学の早期化・長期化にもつながることになる。

春学期・秋学期の正規開講科目をアドバンスト・プレイスメントの対象科目として開放しているが、

高校生の高校での授業時間割の自由度が低く、通常科目を履修しづらい状況にあることが判明したため、夏季集中科目を8月13日から30日の間に開講したところ、114名の履修登録がされ、99名が単位認定された。また、春季休業中3月23日・24日に実施されたトライリンガルキャンプに参加した29名も単位認定を受けた。

桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイスメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。



IV-8. 大学教養レベル「グローバル関連科目」高校生への開放

目的

「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」は高校生と大学生が共に学ぶことを目的とし、平成28年度より開始した。今年度は平成30年8月20日から27日にかけて科目A・科目B・科目C・科目Dの4講座を開講した。

内容・実績

大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座の内容と参加者数は以下の通り。

8月20日、21日 科目A 口語中国語（外国語学部）

参加 高校生3名、在学生40名

8月22日、23日 科目B 英語をとりまく多彩な学問（外国語学部）

参加 高校生8名、在学生26名

8月24日、25日 科目C 英語と日本語でまなぶ「社会のしくみ」入門（総合政策学部）

参加 高校生1名、在学生3名

8月27日 科目D 感染症を巡る諸問題とその対策（保健学部）

参加 高校生2名、在学生1名

受講高校生は、評価に基づき、本学での科目認定対象となる講座である。中国語、英語、社会科学、地球規模で重要となる感染症について、在学生と共に学び、視野が広がる有意義な学修となった。

中国語の科目に参加した学生からは「自分の弱い部分を復習できてよかった」、「教科書以外の単語や文法も学べて楽しかった」「留学生との交流では実際に自分の中国語が通じて嬉しかった」などといった感想が寄せられ、中国語漬けの集中講座は学生たちにとって有意義な2日間であったことが伺えた。

効果・成果

「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」を通じ、総計で大学生70人、高校生14人が参加し、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。

IV-9. グローバル関連科目・COC 関連科目の高校生への開放

関東国際高校の生徒 10 名が外国語学部の春学期正規授業科目を特別聴講

平成 30 年 6 月 4 日と 11 日の 2 週にわたり、関東国際高校の生徒 10 名が、外国語学部 5 限の授業（観光交流文化特論Ⅲ；赤嶺 恵理講師担当）を、ブリッジ授業として特別聴講した。これは、正規授業科目のオープン化の一環として実施されたもので、生徒たちは E 棟 2 階の PBL 教室で、大学生に混ざって講義を受け、いろいろな意見を交わしアクティブラーニングを取り入れた授業を体験した。

2 回目の講義終了時には課題も出され、生徒たちはシートに記入して後日提出し、担当教員からフィードバックのコメントを受けることとなった。



関東国際高校の生徒 15 名が外国語学部の秋学期正規授業科目を特別聴講

平成 30 年 11 月 9 日、関東国際高校の生徒 15 名が、外国語学部 4 限の授業（航空サービス論；志村 良浩教授担当）を、ブリッジ授業として特別聴講した。これは、正規授業科目のオープン化の一環として実施されたもので、生徒たちは井の頭キャンパス E 棟 1 階の教室で、大学生と一緒に講義を受けた。今回は秋学期第 7 回目の講義で、「航空にかかわる仕事」及び「グランドスタッフの仕事」という内容だったが、生徒たちは志村教授からの質問に手を上げて答え、積極的に授業に参加している様子が伺えた。

今年度、このブリッジ授業は、高大連携協定を締結している関東国際高校からの要請に対し、春学期と秋学期の計 2 回実施された。



IV-10. 日英中トライリンガルキャンプの実施

実施日：平成31年3月23日・3月24日
場 所：多摩永山情報教育センター
参加者：高大連携高校生 29名
杏林大学学生（ピアチューター）11名
杏林大学教職員 9名

目的

この学修キャンプは、平成26年度に本学が採択された文科省『大学教育再生加速プログラム（高大接続）』の取組の一環として行われる短期集中プログラムであり、留学経験者や海外留学生を中心とする外国語学部の学生と国際志向の強い高校生とが学年や学校の枠を超えて交流し、日本語・英語・中国語の重要性を再確認することを目的としている。

内容・実績

平成31年3月23日（土）～24日（日）、多摩市の多摩永山情報教育センターにおいて、杏林大学日英中トライリンガルキャンプが一泊二日で実施され、高校生29名、本学在学学生11名（チューターとして参加、うち1名は留学生）、本学教職員9名が参加した。

5回目となる今年度は昨年度に引き続き、中国という国に焦点を当て、「チャイナ・イノベーション」をテーマにプレゼンテーション大会の形で実施した。

初日は、小田急永山駅南口に集合し、到着後すぐ演習室に移動し、高校生は6グループに分かれて進行役の宮首先生のゼミナール学生から2日間の日程のオリエンテーションを受けた。まず初めに、日本語または英語で一人一人自己紹介を行った後、ウォーミングアップとして、二種類のクイズ大会、さらにフルーツバスケットを中国語で行い、緊張の雰囲気も和らいだ。

次に、チャイナ・イノベーションをテーマに、本学中国語学科の学生のプレゼンテーションを行った。ここでは、キャッシュレスは当たり前、デリバリーが浸透している、配車アプリを使用して簡単にタクシーが手配できる、地下鉄の全駅にホームドアが完備されている等、中国社会の現状が紹介され、

キーワードとして、「キャッシュレス事情」、「デリバリー」、「ネットショッピング」、「タクシーの配車アプリ」、「交通事情」が挙げられ、翌日の本番のプレゼンではグループ毎にこの中から一つだけテーマを割り当てられ発表することとなった。その後、高校生たちは、グループ毎に翌日のプレゼン大会準備を開始。その際、チューターである本学学生がグループ毎に付き、プレゼンテーションの指導や文章のまとめかたなど、アドバイス役となった。夕食後も熱心に続け翌日の発表に備えた。

二日目は、朝食後、発表用パワーポイントの最終確認を行い、グループ毎に発表を行った。発表ルールとして、「発表時間は10分以内。1つのプレゼンを日英中の3言語で構成する（発表は日本語で可）」などの条件が課されたが、高校生たちは自分の持っている力を駆使してプレゼンテーションを行い、グループ毎に独自の演出を加えるなどして実に堂々とした発表を見せた。全ての発表終了後、教員より講評があり、第三位から一位までのグループ名が発表され、景品が授与された（1位：第五グループ「タクシー配車アプリ」、2位：第三グループ「キャッシュレス事情」、3位：第四グループ「ネットショッピング～アリババ」でした）。惜しくも入賞を逃したグループの人たちには参加賞が手渡された。

最後にこのキャンプに参加した生徒たちから、「単独の参加だったので、最初は緊張と不安で一杯だったけれど、グループの人たちとすぐ打ち解けて仲良くなることができ、プレゼンの準備等を楽しく作業できて良かった」、「このキャンプを通して中国の国内事情を知ることが出来たので、これから中国語の勉強をしてみたい」、「杏林大学中国語学科の学生となる前に中国語に接する第一歩が踏み出せた」などの声を聞くことができた。

//// 効果・成果 //////////////////////////////////////

高校生 29 名に加え、留学生 1 名を含む大学生 11

名が参加し、「チャイナ・イノベーション」というテーマのもと、中国語や英語を用いた活動に従事した。高校生ならびに大学生が国際語としての英語・中国語を活用しながら、中国の近年の発展を中国留学経験者である大学生が紹介し、「キャッシュレス事情」、「デリバリー」、「ネットショッピング」、「タクシーの配車アプリ」、「交通事情」というテーマについてグループワークを行った。2 日目にはコンテスト形式で、グループワークの成果を、日本語、英語、中国語の 3 か国語を用いてプレゼンテーションを行った。トライリンガルになること、留学経験を積み異文化体験することの重要性を、高校生、大学生が共に学ぶ良い機会となった。



IV-11. 英語キャンプの実施

平成30年8月6日から7日までの2日間、杏林大学井の頭キャンパスにおいて英語キャンプを実施。22名の大学生と11名の高校生が参加し、英語の集中訓練が行われた。

この「英語キャンプ」では、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ語学力を向上させ、異文化理解を深めた。

The English Camp took place for two days (Monday, August 6th and Tuesday, August 7th) at the Inokashira Campus. 34 students (22 university students, 11 high school students and 1 Kyorin adult learner) attended. There were four teachers in attendance for the two days.

On Monday morning orientation took place and all the students were split into groups. The students participated in a Holiday and Postcard lesson. This holiday lesson was designed to build up the students' storytelling ability. The story that they had to tell was not real (which was a lead-in to the main camp activity: News Presentation). The afternoon session was focused on the 'News Presentation' which was the main task during the camp. The students had to make a group presentation of fake news. The news was supposed to be crazy and strange. This encouraged the students to really use their imaginations and be creative. Included in the presentation were two or three news headlines and one or two sport headlines followed by the weather.

In the afternoon we had a break between the News Presentation sessions and the students took

part in a Scavenger Hunt. The students had to scavenge around the university campus looking for clues. When they found the clues, they had to take a photo. Students were given a time limit of 45 minutes. Prizes were given to the top three groups with the most items. Later in the afternoon and in the evening session the students continued working on their presentation. The first day of camp was wrapped up with pizza and movie (Coco). The students enjoyed having dinner and winding down after a long, but productive day.

On the last day (Tuesday) the students finished off their group script and then made a poster for their News Presentation. After lunch the students practiced for the News Presentation individually and together in groups. Help was given on delivery skills, such as pronunciation, intonation, fluency and transitioning. The students were encouraged to use eye contact and use gestures. After the practice the students presented their news and all groups did an excellent job. The combination of high school students and university students was a winner with all groups working hard to complete their tasks. We successfully wrapped up and then finished the camp at 5pm.



IV-12. 中国語研修の実施

平成30年8月6日（月）と8月7日（火）の2日間にわたり杏林大学井の頭キャンパスにて、中国語の学内研修を行った。

本研修は中国語を専攻として学んでいる学生を対象としており、今回の研修では中国語学科の1年生26名に加え、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」事業の一環として聖徳学園高等学校、関東国際高等学校、文京学院大学女子高等学校より高校生3名も加わり、計29名の参加となった。

中国語ネイティブ教員の指導の下、午前中は2ク

ラスに分かれて文法の復習や検定試験の対策などそれぞれのレベルに合わせた内容を学んだ。午後には各クラスに中国人留学生が加わり、発音指導や交流を楽しみながら会話練習などを行った後、学生は中国語での映画の一場面を見ながらセリフの書き取りにも挑戦。

学生たちにとって中国語漬けの学内研修は有意義な2日間だった。普段とは違う環境の中で内容濃く学ぶことによって、個々の成長がみられたのではないかと感じた。



IV-13. プレゼンテーションコンテストの実施

目的

これまで本学在学学生を対象として実施していた「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ大会・同時通訳パフォーマンス」に高校生の参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促す。

内容・実績

【英語プレゼンテーションコンテスト】

平成30年10月6日(土) 英語プレゼンテーションコンテストが、杏園祭の開催されている杏林大学井の頭キャンパスで行われた。二つの高校から、高校生の個人2人、2人グループが2組の計6名と杏林大学学生の個人5人が英語でのプレゼンテーションを競った。高校教員も1名聴衆として参加した。

Jason Somerville 特任講師の進行で、審査員委は、スノードン国際交流センター長、関美和准教授、Eric Trautman 非常勤講師が担当した。タイトルは例えば「Tokyo's Hidden Gems」「Flowing like cells-Movies teach living English」「Tokyo 2020-the

Good outweighs the Bad」など、身近な英語学習やオリンピック2020などが取り上げられた。個人は5分間、グループは10分間の時間で、パワーポイントを活用し自分たちの論点を、英語でアピールをした。

審査結果、一位は市川高校の高校生、二位は杏林大学の個人、3位は杏林大学の個人にきまり、坂本学部長から賞状とプライズを手渡された。

今年は例年になく発表者のレベルが高く、講評として発表後の審査委員との英語での質疑応答も非常によくできていることが評価され、参加者の今後の学修や課外活動での活躍が期待された。



【中国語カラオケ大会と同時通訳パフォーマンス】

平成30年10月6日(土)杏園祭の初日に井の頭キャンパスF棟の国際交流プラザにて中国語学科のゼミナール聯合による日中カラオケ大会の開催と同時通訳教室を活用したパフォーマンスが披露された。

日中カラオケ大会は張弘先生のゼミナールが中心となって企画し、中国語学科の1年生から9名、3年生から25名と中国人留学生8名、計42名が参加し、90脚用意した席が満員近くになる来場者で会場の賑わうなか、大会が始まった。

司会は日本人学生2名と中国からの留学生、計3名で進行し、オープニングは3年生男子によるダンスあり歌ありのパフォーマンスで会場を一気に盛り上げた。その後留学生は日本語で、日本人学生は中国語で歌を披露。なかには日中国際チームとして日本人学生と留学生が組んで参加するチームもあり、歌を通して会場は日中友好ムードに包まれた。審査は来場者全員の投票形式で行われ、入賞者は以下のチームとなった。

- 一等賞：留学生 【冯燕飞】（曲名：Kiroroの未来へ）
- 二等賞：チーム对不起我的中文不好【原田稀有 三家優花 黒田文馨 山田未来 本間琴那 迎彩乃 松久樹里】（曲名：对不起我的中文不好）
- 三等賞：日中国際チーム【顾子轩 下村実貴生】（曲名：いきものがかり YELL）
一年男子【龔家佑】（曲名：涙そうそう）

後半の部では張弘先生と千野先生のゼミナール学生による同時通訳室にて通訳ブースを使って行ったパフォーマンスが披露された。中国語学科では毎年、アフレコ大会が恒例となっていたが今年は学科初となるコントや学生が脚本から作り上げる演劇などに挑戦。パフォーマーや来場者合わせて90名で盛り上がった。

舞台上で日本人学生がコントや劇を中国語で演じ、通訳ブースを使って中国からの中国人留学生が日本語で同時通訳を行った。また学科紹介として、今までの活動記録や普段の様子の写真などをムービーにして流し、より多くの方々に中国語学科を知って頂くこともできた。



//// 効果・成果 //////////////////////////////////////

大学生と高校生が一堂に会し、日々の学修の成果を競い合うというのは貴重な機会であるだけに、双方がお互いから刺激を受けることとなった。今回参加された皆さんがこの経験を一つの糧としてさらに

高い目標を達成できるよう邁進していってくれることを願いつつ、杏林大学では今後もこのようなイベントを豊富に用意し、高大接続の機会拡大を図っていきたい。

IV-14. グローバル AP 「同時通訳ブース見学会」の実施

目的

杏林大学の外国語学部中国語学科では「中国語学科・日中通訳翻訳プログラム」を通じて4年間で世界に通用する中国語が使える人材育成を目指しており、本学には同時通訳演習室が設置されている。本見学会は本学学生と高校生に実際の授業で使用する同時通訳演習室を体験してもらい、大学での学びに対しより一層の理解を深めることを目的として行った。

内容・実績

平成30年8月6日、杏林大学井の頭キャンパスにてグローバル AP 「同時通訳ブース見学会」を開催した。当日は本学外国語学部1年生26名、連携高校の生徒3名が参加した。高校生は初めに施設説明を受け、実際に通訳ブースに入り機器の操作などを体感した。見学会に参加した高校生からは「同時通訳演習室という部屋を見学し、オリンピックなどで使用されているものと同じ機械が置いてあり、すごいと思った。同時通訳についてもっと知りたいと思った」「大学でこんな勉強もできるなんて知らなかった。日本語と中国語を同時に聞いて不思議な感じがした」という声があった。

効果・成果

今回の見学会を通じ、本学での学びが少しでも高校生に伝わったのではないかと感じられると同時に、こうした施設に対し高校生の関心の高さも伺えた。



IV-15. IELTS 対策講座の実施

実施日：平成30年6月23日・30日、平成31年2月9日・16日
場 所：杏林大学井の頭キャンパス

目的

英語学習に意欲的な高校生に英語検定試験とその対策講座を開放することで、大学での学びに向けた語学力の確認を目的とする。また本講座は、高大接続の観点からIELTSの試験を受験希望する在校生と高校生に対し、IELTSを主宰する日本英語検定協会の講座対策プログラムを、民間から派遣された講師が大学の教室で講義を行うプログラムである。

内容・実績

平成30年6月23日(土)・30日(土)の午後3時より6時迄、井の頭キャンパスD棟105教室において、本学在学生及び高校生向けIELTS対策講座が開始された。

今回は計11名の意欲的な在学生と高校生が参加し、授業に臨んだ。ネイティブの担当講師の英語の説明に、全員集中して真剣に取り組んでいた。

また平成31年2月9日(土)・16日(土)の午後3時より6時迄行われた講座には杏林大学外国語学部の学生4名、高校生11名、計15名の在学生と高校生が参加した。

効果・成果

対策講座の受講でアカデミックな英語力を向上させ、検定試験受験に至る学習意欲を継続できた。



IV-16. ルーブリックの入学試験での利用

目的

平成26年度より開発が始まったルーブリックの目的は、学力の3要素のうち、試験でなく課外活動や種々の体験で評価されやすい主体性、協働性、多様性、課題発見・解決力および言語の4要素を図るためである。

内容・実績

平成29年5月、学力の3要素のうちの一つ「主体性も持って多様な人々と協働して学ぶ力」と、「課題発見とその解決をする力」および「語学力（話す力（対話力+プレゼンテーション力）、聞く力、書く力、読む力）」に関してのルーブリックを作成し、HP上で公開した。同時に、平成30年度外国語学部AO入試第Ⅱ期（グローバル型）でルーブリック・小論文による事前資格審査、ルーブリックに基づくプレゼンテーションを含む面接によって選考を行うことを公表した。

効果・結果

学力の3要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができる力とは異なり、主体性・多様性・協働性という様々な経験によって身に着けた能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、それらの「生きる力」を伸ばすために大学進学を目指す高校生を選抜する入試が実施された。また今年度は導入2年目であり、選考日を12月15日にした影響からか、外国語学部全体の募集人員10名に対し、志願者15名、合格者6名という結果となった。

ルーブリック回答の流れ

以下の手順に従って回答していきましょう。

① ルーブリックを理解する



② 自分の高校時代を振り返り、力を入れた経験を思い出す



③ 自分の経験を評価シートの基準に合わせて自己評価 2つの経験について回答シートに記入



④ 言語能力について自己評価・回答シート記入



⑤ 経験・成果を裏付ける根拠資料を用意

2

ルーブリックってなに？ ～ルーブリックを理解する～

ルーブリックとは、皆さんがこれまでの経験の中で身に付けた能力のレベル、学習の到達度を数値化したものです。

皆さんは、「学力の3要素」という言葉を聞いたことがありますか？

- 学力の3要素
- ① 十分な知識・技能
 - ② それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力などの能力
 - ③ これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

知識・技能は、マークシート式の試験やテストでも測ることができますが、②の思考力・判断力・表現力は記述式でないとなかなか測ることができません。さらに、③の主体性・多様性・協働性は試験やテストでは測ることができません。

皆さん一人一人の進路に応じた多様な可能性を伸ばすためには、皆さんの幅広い資質・能力を多面的に評価し、育成していくため、学校内の活動での学習成果だけでなく、一人一人の目標や進路などに応じて自主的に行われる学習などについても、学びの成果として評価する必要があります。

杏林大学のルーブリックでは、多面的な能力として「主体性」「多様性」「協働性」「課題発見・解決力」、英語や中国語など外国語の「語学力（話す・聞く・書く・読む）」の到達度がセルフチェックできるようになっています。



多面的な能力について
多面的な能力を測るための基となる経験に関しては、4つの領域があります（4ページ「ルーブリック」で取り扱う4つの領域について）を参照。高校在学中に取り組んだ経験の中から2つを選択し、それぞれの経験について記入してください。なお、領域に関しては重複しても大丈夫です（例えば、A領域だけで2つ選ぶことも可能です）。

言語について
言語に関しては、2言語までチェックできるようになっています。それぞれの能力は、レベル1～5の5段階で数値化され、段階を踏んで難易度が上がっていきます。数値化するレベルには、その根拠や指標が「ルーブリック評価シート」（8～11ページ）に記載されています。それをよく読み、自身に当てはまるレベルを選択し、別紙回答シートに数値を記入してください（6ページ「回答シート記入上の注意点」を参照）。そのレベルとした根拠や理由も記入することができます。

根拠資料
上記2つの経験で出した成果（結果や、制作物など）を示す根拠資料を準備・整理してください。（7ページ「自己評価を裏付ける根拠資料について」を参照）

※なお、お寄せいただいた情報の個人情報、杏林学園が定める個人情報保護規程を遵守し取り扱います。

3

IV－17. 高等学校での講演

日 時：平成30年4月27日
主 催：関東国際高等学校
講 評 役：ポール・スノードン国際交流センター長
内 容：中国、ロシア、韓国、ベトナムの近隣諸国に3週間の研修に行った4組の高校生の研修報告に対して講評を行った。
参 加 者：関東国際高等学校の海外研修生4組

日 時：平成30年5月9日
大学説明会
主 催：関東国際高等学校
説 明 者：岡田洋二入学センター長（保健学部教授）
医療系の代表として本学保健学部の全体説明を実施してほしい、との要請を受け説明会の実施に至った。
参 加 者：普通科理系クラス2～3年生の生徒約40名及びその父母約15名

日 時：平成30年6月18日
主 催：聖徳学園高等学校
内 容：杏林大学で10週間のテキサス A&M 大学日本語・日本文化研修「A&M Japan Language & Culture Program」に参加中の学生17名と高校生との交流会
参 加 者：高校生27名、高校教員5名

日 時：平成 30 年 6 月 18 日
 主 催：日出学園高等学校
 内 容：杏林大学で 10 週間のテキサス A&M 大学日本語・日本文化研修「A&M Japan Language & Culture Program」に参加中の学生 15 名と高校生との交流会
 参 加 者：高校生 40 名、高校教員 5 名

日 時：平成 30 年 6 月 20 日
 主 催：都立羽村高等学校
 説 明 者：岡田洋二入学センター長（保健学部教授）
 看護系の大学進学を考えている生徒たちに、本学保健学部の説明及び受験勉強の方法等を指導してほしい、との要請を受け説明会の実地に至った。
 参 加 者：2～3 年生の生徒 13 名

日 時：平成 30 年 10 月 3 日
 主 催：都立調布南高等学校
 講 演 者：阪本奈美子教授（保健学部教授）
 講演テーマ：法医学概論
 参 加 者：高校生 34 名

日 時：平成 30 年 10 月 13 日
 グローバル AP セミナー
 主 催：工学院大学附属中学校・高等学校
 講 演 者：八木橋宏勇准教授（外国語学部）
 講演テーマ：「ジブリ映画字幕翻訳から学ぶ異文化間コミュニケーション」
 参 加 者：高校生 44 名と高校教員 2 名

日 時：平成 30 年 10 月 13 日
グローバル AP セミナー
主 催：工学院大学附属中学校・高等学校
講 演 者：森美加助教（保健学部）
講演テーマ：「映画で学ぶ 診療放射線技師の世界『ハリー・ポッターと賢者の石』より」
参 加 者：高校生 32 名、高校教員 2 名

日 時：平成 30 年 10 月 31 日
Global Week
主 催：順天高等学校
講 演 者：Jason Somerville 特任講師
講演テーマ：「Student interaction in English using smartphone apps」
参 加 者：高校生 26 名、高校教員数名

日 時：平成 30 年 10 月 31 日
「考える」ワークショップ
主 催：順天高等学校
講 演 者：マルコム・フィールド教授（総合政策学部）
講演テーマ：「技術は（伝統）文化を殺すか？」
参 加 者：留学生を含む高校生 13 名、教員 4 名

日 時：平成 30 年 11 月 1 日
Global Week
主 催：順天高等学校
講 演 者：ポール・スノードン国際交流センター長
講演テーマ：「Gulliver in Japan」
参 加 者：ドイツ人とフィンランド人を含む高校生 12 名、アメリカ人とオーストラリア人を含む教員 4 名

日 時：平成 30 年 11 月 9 日
Shotoku Global Day
主 催：聖徳学園高等学校
講 演 者：ポール・スノードン国際交流センター長
講演テーマ：「本物の英語を知ろう」
参 加 者：高校生 33 名、教員 4 名

日 時：平成 30 年 12 月 9 日
World Café
主 催：神奈川総合高等学校
キノトスピーカー：Eric Truatman 非常勤講師（保健学部）
テ ー マ：教育、AI、幸福、LGBTQ
参 加 者：神奈川総合高校の高校生 57 名、近隣の他の高等学校
15 校の高校生 85 名、教員 19 名

日 時：平成 31 年 3 月 12 日
1 年次授業「産業社会と人間」
主 催：都立青梅総合高等学校
発 表 者：中国からの本学留学生 6 名（交換留学生 3 名、大学
院国際協力研究科院生 3 名）
発表テーマ：「異文化理解」
参 加 者：高校生計 240 名（40 名×6 クラス）

〈波及効果〉

連携協定高等学校からの要請や本事業にて開催している「杏林 AP ラウンドテーブル」を通じて、高大接続活動の一環として高等学校へ出張講演や実習など様々な活動を実施している。本事業での活動が全学的な波及効果へと繋がり、高大接続・高大連携による協力も緊密となった。

IV－18. 中高生と大学生の高大連携ボランティア活動

主 催：聖徳学園中学・高等学校「いじめ防止プログラム推進」
担当教員：杏林大学総保健学部看護学科学校看護学教室 亀崎路子教授
内 容：「いじめ防止プログラム推進」の一貫として活動を支援

活動の背景

聖徳学園中学・高等学校では、2015（平成 27）年度に、生徒が文部科学省主催の全国いじめサミットに参加をしたことをきっかけに、2016（平成 28）年度より「いじめ防止プログラム推進」に力を入れてきた。担当スクールカウンセラーの山名和樹先生から依頼があり、杏林大学学生の希望を受けて、いじめ防止の目的とした中高生とのピアグループ活動が始まった。

2017（平成 29）年は、6月から3月までの期間の数日間、ボランティア活動の一環として、聖徳学園中学・高等学校において、いじめ防止を目的としたピアサポーター（中学生）を支援する大学生のピアエデュケーション活動を行った。ピアサポーターの成長する姿は、大学生にとっても生きて働く力となる。

2018（平成 30）年度は、方向を変えて、「いじめ防止」から、子どもたちの「心の健康づくり」を目的とした予防的な活動や、さらには学校や地域の環境をよりよくしていくことを目標に自分たちにできる新たなボランティア活動を立ち上げていこうということとなる。

目的

本活動は、中高生と大学生が連携して、自分たちの手で学校をよくするために、まずは聖徳学園中学・高等学校（武蔵野市）の先生方と大学生が連携して

「心の健康づくり」を目的とした授業を行い、続いて、大学生の声かけに集まってきた中高生を主体にして、新たなボランティア活動を立ち上げていこうとする共同プロジェクトである。

内容・実績

平成 30 年 6 月 30 日（土）に聖徳学園において、担当のスクールカウンセラーの山名和樹先生と生徒および杏林大学の学生とで、学校をよくする活動について、自分たちにできることを話し合いました。まずは、中学生のうちから杏林大学生を知ってもらおうということになり、総合的な学習の時間に、中学 1 年 3 クラスに 1 コマずつ「心の健康づくり」をねらいにした授業を、大学生が行った。

学生は、数回集まって検討し、テーマ「コミュニケーションについて考えてみよう！」の指導案を作成。その後、7 月 11 日、8 月 6 日、8 月 23 日と、ミーティングを重ね、個別にも学生間で打ち合わせを行い、メンバーのアイデアを入れ込んで授業づくりを行った。9 月 21 日には、スクールカウンセラーの山名先生が大学に来てくださり、指導案への助言をいただいた。SNS を題材に、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションについて、パワーポイントを使って分かりやすい説明をし、トラブル事例を提示して、解決策を考えさせるグループワークを行った。

その後、ワールドカフェ方式を取り入れた意見交換を行い、SNS とつきあっていくための3つのルールを決めて発表するグループワークを行った。スムーズな展開になるように、学生たちは綿密に役割分担を行い、当日となる。9月25日（火）には、中学1年3組と1年2組、9月28日（金）には中学1年1組において授業を行う。授業中は、中学生同士で活発な意見交換が行われ、授業後には、授業を通して普段のコミュニケーションに生かそうと思うことへの感想が、多数出された。また、授業の終わりには、生徒に新たなボランティアを立ち上げることの呼びかけを行い、終了となった。

続いて、11月下旬から、ボランティア活動を募集するためのポスター（図1）を大学生が作成し、校内にポスターを掲示いただき、これに対して中高生4名が集まる。第1回目のミーティングを12月

6日（木）に、2回目を2019年3月7日（木）に、聖徳学園で行った。高校生男子3名、中学生1名は欠席、大学生2名と大学担当教員、スクールカウンセラー山名先生の7名で、これからの新しい活動について話し合った。まずは、聖徳学園ならではの特長、校風や文化、アピールできることなどをヒントに、聖徳学園について入学した保護者に、生徒の視点からアピールしていくこととなった。

//// 効果・成果 //////////////////////////////////////

生徒自らが聖徳学園を盛り上げていこうという愛着や心意気を感じることができた。大学生は、応援する気持ちが高まり、この活動は、来年度に引き継がれることとなった。

IV-19. 都立青梅総合高等学校と昭和鉄道高等学校の生徒がインターンシップを体験

日 時：平成30年7月26日・27日
場 所：杏林大学井の頭キャンパス
担 当：杏林大学キャリアサポートセンター、高大接続推進室、
入学センター、井の頭図書館、学生支援課
内 容：「職業・仕事、働くということ」について本学にてインターンシッ
プを体験
参 加 者：都立青梅総合高等学校の生徒2名、昭和鉄道高等学校の生徒2名

目的

都立青梅総合高等学校と昭和鉄道高等学校の要請を受け、高校生に働くことに対する意識付けを目的とし本学にて職業体験を実施した。

内容・実績

今回の体験は、青梅総合高校が井の頭キャンパスで3回目、昭和鉄道高校は、今回が2回目のインターンシップとなる。

初日の朝、高大接続推進室に来校した生徒たちは、まず地域交流課高大接続推進担当の職員とともにキャリアサポートセンターに向かい、担当副部長から「働くということ」についてのガイダンスを受けた。その後、2人一組で午前中は高大接続推進室と入学センターでの業務を体験。高大接続推進室では教員への配付物に説明書を挟み込み、メールボックスへ投函する作業、入学センターではオープンキャンパス用の袋詰め作業、そして、地域交流課ではパソコンへの入力作業等を行った。昼休みに学食初体験をした後、午後からは図書館で書架の移動、学生

支援課では自転車置き場の整理、番号確認作業等を職員の指導を受けながら遂行し、初日の予定を終了した。

二日目は、始めにキャリアサポートセンターで「大学の仕事について」再びガイダンスを受け、同センター内での入力作業後、入学センター、地域交流課を回った。午後からは、昨日に続いて図書館でカウンター業務、庶務課では郵便物の区分け、投函作業等を体験した。

効果・成果

インターンシップ終了後、地域交流課高大接続推進担当の職員2名と2日間の振り返りを行い、生徒たちからは、「大学の事務職は、当初自分で描いていたイメージとは異なり、細かい様々な業務があることがわかり、それを体験させてもらって良かった」、「今回のインターンシップの体験を、残された自分の高校生活に活かしていきたい」などの感想が聞かれた。高校生の働くことに対する意識が強く感じられた。

IV-20. 都立三鷹中等教育学校生徒が職場見学と職場体験

日 時：平成30年11月13日・11月14日～16日
場 所：杏林大学井の頭キャンパス
担 当：杏林大学高大接続推進室、キャリアサポートセンター、
入学センター、井の頭図書館、学生支援課、情報センター
内 容：職が見学及び「職業・仕事、働くということ」について本学にて
インターンシップを体験
参 加 者：都立三鷹中等教育学校生徒（中学1年生）4名、（中学2年生）3名

目的

三鷹中等教育学校より要請を受け、「働くことの大切さを学ぶとともに、自分の進路に関心を持ち、目的意識を高め、望ましい職業観・勤労観を身につけて日常生活の向上に資する」、「地域の大人とふれあうことにより、社会の一員として社会性を身に付ける機会とする」ことを目的とし実施した。

内容・実績

職場見学は4名が参加。オリエンテーションの後に入学センター、高大接続推進室、教務課、学生支援課、地域交流課、キャリアサポートセンター、井の頭図書館、情報センターを見学。最後に、1日の振り返りを記入し、大学職員が生徒の予め用意した質問に答え見学を終了した。

また職場体験は3名が参加し、初日のガイダンスの後、学生支援課、入学センター、井の頭図書館、キャリアサポートセンターで、各種の作業を体験。自転車置き場の整理や受験生向け書類の分類整理作業、ポスター作成、PC入力や掲示物の貼付、図書館での書架移動やカウンター受付業務など、幅広い仕事を体験した。

効果・成果

毎日、仕事の最後には振り返りの記入と大学職員との質疑応答で、大学の事務の仕事を通して、「働くこととはどういうことか」についても各自が考える良い体験ができたことから、職場見学を通じて高校生は働くことに対して意識を強め、本見学会の目的を果たしたといえる。



IV-21. 聖徳学園高校生がモデル生物を用いた体験実習

日 時：平成 30 年 11 月 10 日
場 所：三鷹キャンパス講義棟 4 階第 6 講堂及び講義棟 5 階生物学実習室
担当教員：医学部生物学教室教員（栗崎教授、平井講師、加藤講師、佐藤実
験助手）
内 容：「モデル生物（キイロショウジョウバエ）を用いた生物学実習」
参 加 者：聖徳学園中学・高等学校の生徒 11 名、教員 1 名

目的

聖徳学園中学・高等学校からの要請を受け、本学医学部と連携し、高校生に対して大学の授業を体験させることで、意識向上や大学における具体的な学びについて考えさせることを目的とし、実習を行った。

内容・実績

始めに栗崎教授より、本日の実習で使用するレーザー顕微鏡とキイロショウジョウバエについての説明があった。続いて、平井講師による細胞分裂期における染色体の観察についての説明を行った。

その後、2グループに分かれ、講義棟5階生物学実習室にて加藤講師による「キイロショウジョウバエの脳組織の観察」と平井講師による「体細胞分裂と減数分裂の分裂期における染色体の観察」を行った。「キイロショウジョウバエの脳組織の観察」では、キイロショウジョウバエの幼虫の脳組織を解剖し、プレパラートを作成した後に蛍光実体顕微鏡で観察を行った。続いて、蛍光標識による細胞形態の可視化の有用性について、生物学教室で予め用意してい

た固定標本を対象に、蛍光実体顕微鏡とレーザー顕微鏡でそれぞれ観察を行った。

また、「体細胞分裂と減数分裂の分裂期における染色体の観察」では、生物学教室で予め用意していた標本を用いて染色体を観察し、染色体の形と配置から分裂期の各ステージに対応する染色体を探した。最後に「キイロショウジョウバエの脳組織の観察」について、3次元に再構成した画像を基にして、「体細胞分裂と減数分裂の分裂期における染色体の観察」については、観察時に撮影した画像を基にしてそれぞれ発表を行い本講義体験が終了した。

効果・成果

生徒からは「蛍光タンパク質を活用してがんの発見・治療に役立っている」、「科学の進歩を実感できた」などの声が聞け、本実習を通じて、大学での学びを高校生に体験させ理解させることができたと共に、本学と聖徳学園中学・高等学校との連携強化に繋がった。



IV-22. 総合政策学部 馬田啓一賞を茨城県立藤代高校生徒が受賞

12月19日、平成30年度馬田啓一賞の授与式が行われた。この賞は、総合政策学部の馬田啓一名誉教授のご寄付のもと設立され、学生の研究と勉学を奨励するため、毎年、一定の課題を募集し、総合政策学部生と高校生の部に分けて表彰を行っている。

今年の課題テーマは、総合政策学部生の部は河合雅司さん著書『未来の年表 人口減少日本でこれから起きること』の書評で、優秀賞に奥山 優希さん、尾崎 太一さんの2名（総合政策学部）が選ばれた。高校生の部のテーマは高校生の部は「AI 化がもたらす未来とは」についてのエッセイで、黒田 慧晴さん（茨城県立藤代高校1年）が優秀賞の受賞となった。



IV-23. 都立調布南高校の学校運営連絡協議会に出席

日 時：平成30年5月15日
平成30年10月9日
平成31年3月12日
場 所：都立調布南高等学校
担当教員：ポール・スノードン国際交流センター長

平成30年5月15日、ポール・スノードン国際交流センター長が、協議委員として都立調布南高校の平成30年度第1回学校運営連絡協議会に参加した。校長および各担当の内部委員の先生による各活動部

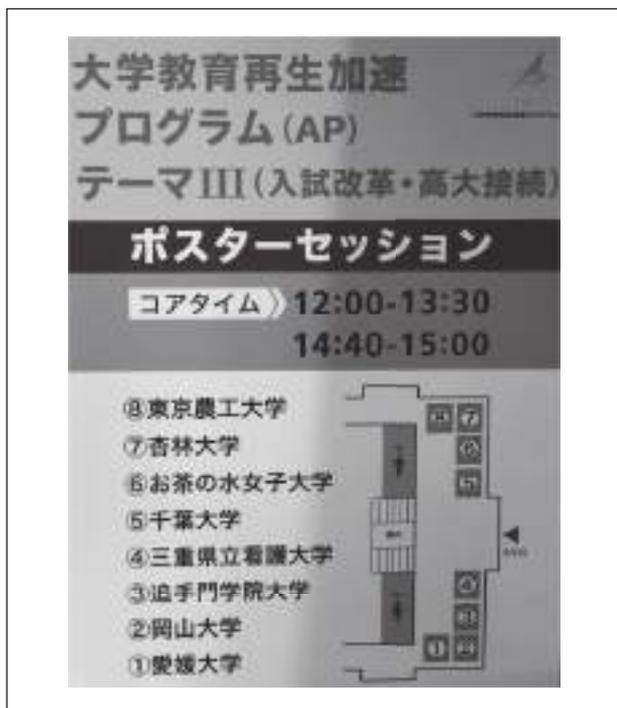
門の説明後、外部の委員にそれぞれの立場からコメントをする機会が与えられ、スノードンセンター長は、主に高大接続とルーブリックについて発言を行った。

IV-24. 広報・取材

1. ポスターセッション

AP採択事業「入試改革・高大接続」8大学のポスターセッションに参加

平成30年5月26日に大学入学者選抜研究連絡協議会の会場（於 電気通信大学）で行われた、「大学教育再生加速プログラムテーマⅢ」に採択されている8大学合同のポスターセッションに参加した。



2. 大学教育再生加速プログラム (AP) テーマⅢ：入試改革・高大接続

本事業の採択校の幹事校である東京農工大学がとりまとめた広報誌の作成に協力を本学が紹介された。



3. 愛媛大学と意見交換

平成 31 年 1 月 23 日、愛媛大学の大学教育再生加速プログラムテーマⅢ（高大接続）の担当をされている教員と事務方の 2 名が本学を訪問。テーマⅢ（高大接続）のなかで特に、両大学が実施しているアドバンスト・プレイスメントについて、それぞれの状況と課題などについて意見交換を行った。

4. 金沢大学が来校

平成 31 年 3 月 28 日に、金沢大学の人間社会学域の教員 2 名と事務職員 1 名が本学を訪問。人文・社会科学系における高大接続の先進事例として本学の AP の取組の詳細を説明した。

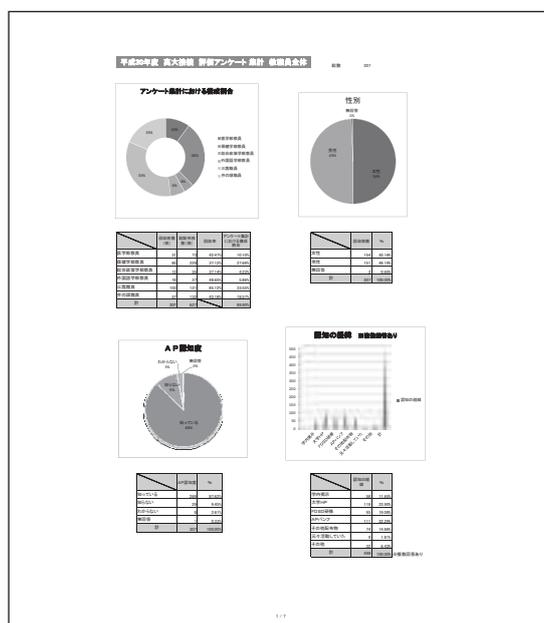
事前に送られてきた質問状をもとに、アドバンスト・プレイスメント、本学で実施されている高大接続の学習イベント等の高校側のメリットと大学側のメリット、ピアチューターの位置づけ、入試へのメリット、学内の実施体制など多岐にわたる質疑応答を行った。その後、図書館や AP 補助事業で整備したライティングセンター、英語サロン・中国語サロン、同時通訳室などの見学を行い、有益な意見交換の場となった。

5. 松商短期大学の AP フォーラムで事例報告

平成 31 年 3 月 7 日に松本大学松商短期大学の第 5 回 AP フォーラムで、坂本ロビン学部長が依頼を受け、杏林大学の AP の取組の事例報告を行った。基調講演は「新学習指導要領の方向性と大学共通テストで問いた力」を大学入試センターの大杉住子氏からあり、「英語 4 技能試験」についてベネッセコーポレーションと日本英語検定協会から報告、そして、「杏林大学の取組み」があり、「松本大学松商短期大学の取組み」の後、パネルディスカッション「高大接続改革の現状と課題」で坂本学部長も登壇し、活発なディスカッションを行った。

6. 平成 30 年度 高大接続評価アンケートを実施

本年度も学内の教職員を対象とした、本事業における評価アンケートを実施した。質問項目は本事業の認知度やアドバンスト・プレイスメント、ルーブリック入試活用、高校生向けのイベントの開催、本事業の活動に参加しているかを問うものであり、補助金終了後に必要だと思われることについて自由記述欄を設けた。自由記述欄には「事業継続のためのプラットフォームづくりが必要」「高校生が参加できるプログラムの継続実施」「連携高校との緊密で強固なネットワーク作りを最終年度中に行う」「大切な事業なので補助金が終了しても継続した方が良くと思う」など建設的な意見があがった。



IV – 25. 平成 29 年度の事業報告書の作成と配布

平成 29 年度を対象とする、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」：大学教育再生加速プログラムテーマⅢ（高大接続）の事業報告書が完成した。



〈会議開催日程一覧〉

IV-26. 杏林AP推進委員会(第22回～第26回)

平成30年度 第22回 杏林AP推進委員会

日 時：平成30年4月9日（月）14：30～15：00
場 所：杏林大学三鷹キャンパス 本部棟11階 会議室

平成30年度 第23回 杏林AP推進委員会

日 時：平成30年7月9日（月）15：00～15：45
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成30年度 第24回 杏林AP推進委員会

日 時：平成30年10月1日（月）14：30～15：45
場 所：杏林大学三鷹キャンパス 本部棟11階 会議室

平成30年度 第25回 杏林AP推進委員会

日 時：平成30年12月10日（月）11：00～11：45
場 所：杏林大学三鷹キャンパス 本部棟11階 会議室

平成30年度 第26回 杏林AP推進委員会

日 時：平成31年3月11日（月）11：00～11：45
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

IV-27. 高大接続推進委員会(第36回～第41回)

平成30年度 第36回 高大接続推進委員会

日 時：平成30年5月2日（水）16：20～
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成30年度 第37回 高大接続推進委員会

日 時：平成30年7月4日（水）16：20～
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成30年度 第38回 高大接続推進委員会

日 時：平成30年9月5日（水）16：20～
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成30年度 第39回 高大接続推進委員会

日 時：平成30年11月7日（水）16：20～
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成30年度 第40回 高大接続推進委員会

日 時：平成31年1月9日（水）16：20～
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議室

平成30年度 第41回 高大接続推進委員会

日 時：平成31年3月6日（水）16：20～
場 所：杏林大学井の頭キャンパス C棟5階 大会議

V. 事業の評価：平成 29 年度事業を対象に

第三者評価委員会の開催と評価結果

平成 29 年度の AP 補助事業を対象とする第三者評価委員会を、平成 30 年 9 月 29 日（土）14：00 より井の頭キャンパスで開催した。3 人の委員の先生からあらかじめ提出していただいた評価書をもとに、課題や改善点も含め、席上での杏林大学側からの細かい実情の聞き取りも含め、委員の先生たちから忌憚のない評価を頂戴することができた。



第三者評価委員会の評価報告書は下記のとおりである。

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）
平成29年度事業
杏林大学「日英中トライリンガル育成のための高大接続」第三者評価報告書

【第三者評価委員会開催】

日時：平成30年9月29日（土）14：00～15：30

場所：杏林大学 井の頭キャンパス C棟（本部棟）5階 応接室

評価委員：委員長 平方邦行氏（工学院大学附属中学校・高等学校 校長）

委員 鈴木 栄氏（東京女子大学 教授）

委員 藤井達也氏（埼玉県立和光国際高等学校 教諭）

杏林大学参加者：

大瀧 純一学長、坂本ロビン外国語学部長、ポール・スノードン国際交流センター長、
稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳副部長、晝間大郎課次長

各評価委員の第三者評価書と評価委員会での追加の指摘等をもとに、以下に評価の概要を記す。個別の評価については、添付の第三者評価書を参照されたい。

【評価の概要】

5年目を迎えて継続している本事業では、アドバンストプレイスメントの実施とルーブリックの入試での活用が高く評価できる。2020年の入試改革に向けて、いくつかの大学ではアドバンストプレイスメントと称せずに、受験生の囲い込み的に、高校生に単位を認定する授業を実施している場合がある。杏林大学の本事業では、他の3大学との単位互換協定を結び本来的なアドバンストプレイスメント（以下、AP）の実施ができたことは評価できる。つまり関係する高校や大学との組織作りが始まったといえるので、規模を拡大していった欲しい。APは当初、高校単位で募集する形にしたが、平成30年度の夏季講座では個人単位で募集して時期的にも多くの高校生の参加があった。今後は、高校・大学へのPR発表会などの発信による組織アプローチと高校生個人へのアプローチの双方が望まれる。

グローバル人材とは「自己変容できる知性」をもった人材のことであり、ブルームの6段階の学習の分類（記憶・理解・応用・分析・評価・創造）にもとづいて、ルーブリックを考えることが必要であろう。9月にテレビ番組の高校生クイズでは、知識量を競うクイズから創造性を競うもの（浮いている多数の風船をどれだけ早く割れるか）になっていて、学校・大学のみならず社会全体がグローバル人材的な知性を求めていることがわかる。

高校生と大学生が参加する各種の学修イベントについては、「参加者の声や成果物の公表」、「課題点の公表」、「継続させること」が重要な要素である。英語一辺倒に傾きがちな中で、中国語研修や中国語カラオケ大会など、他言語の学び・発表力・表現力を試す学修は価値がある。高校生のみならず、ライティングセンターやトライリンガルキャンプ

での大学生が「参加して教える」ことでリーダーとしての素養を身に付けていくことも期待できる。英語プレゼンコンテストに関して、高校生に対する動機づけとして、もう少し敷居の低い「英語に関するなんでも発表会」のような企画も考えられる。

さらに、こうした杏林大学が主導するイベントを、連携高校が自律的に高校主催の行事に発展させていくことが、本事業の高大接続のさらなる展開として期待される。（注：既に各高校ではいろいろな取り組みが実施されており、高校同士の連携も行われている。）

こうした高校生・大学生向けの学修イベントと、教職員向けのFD/SDの参加者には、「認定証」のようなものを発行することで、本事業の認知度も高まるとともに、受領した生徒・学生・教職員への励みとなるであろう。

非常に多彩な事業項目を行っている中で、波及効果となる事業はグローバルという本事業の目的に合致したもののみを行うことで、負担を減らすこともよいのではないかと。

【評価のまとめ】

高大接続の意義は、入試改革と高校・大学の三位一体の改革とされているが、その理由や目的がはっきりしていない部分もある。小・中・（高）の教育が先行して変わる中で、入試と大学が変わらなければならないという理解をしている。今では知識はPCとネットで簡単に手に入れることができるので、情報の応用・分析や創造性の育成が大学に課された教育課題であろう。

平成29年度では、AP（アドバンストプレイズメント）の実施とルーブリックの入試での活用が大きな成果である。また、中間評価でA評価を受けた点も評価できる。その過程で杏林APラウンドテーブルや大学との連携もでき、組織的な展開がみられている。今後、1年半の事業のさらなる展開が期待できるが、補助期間終了後の継続も視野に入れてほしい。

【添付資料】

第三者評価書3通

- ・平方邦行委員長
- ・鈴木 栄委員
- ・藤井達也委員

【評価のための根拠資料】

- ・平成29年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書
- ・日英中トライリンガル育成のための高大接続 事業報告書 平成29年度

以上

（注）アドバンストプレイズメントは、米国 The College Board の登録商標です。

VI. 事業推進組織 委員一覧

平成 30 年度 杏林 AP 推進委員会 委員一覧

大瀧純一	学 長
渡邊 卓	医学部長
神谷 茂	保健学部長
大川昌利	総合政策学部長
坂本ロビン	外国語学部長
ポール・スノードン	国際交流センター長
稲垣大輔	高大接続推進室長（外国語学部教授）
荒木利直	事務局長
島津敏雄	広報・企画調査室長
黒田幸司	大学事務部長
森 芳久	井の頭事務部長
青柳貴徳	井の頭事務部副部長
晝間大郎	地域交流課（高大接続推進担当）課次長（事務局）

平成 30 年度 高大接続推進委員会 委員一覧

室 長	稲垣大輔	外国語学部
	栗崎 健	医学部
	亀崎路子	保健学部
	岡村 裕	総合政策学部
	高田京子	総合政策学部
	藤田由香利	外国語学部
	ジェイソン・サマービル	特任講師
	黒田幸司	大学事務部
	森 芳久	井の頭事務部
	浅野 稔	医学部事務部
	清水みさ子	教務課
	田澤かおり	教務課
	前田英人	教務課
	酒井あかね	広報・企画調査室
	後藤達也	医学部事務課
	青柳貴徳	井の頭事務部
	晝間大郎	高大接続担当（事務局）
	小金井恵美	高大接続担当（事務局）
	安達歩美	高大接続担当（事務局）

文部科学省「大学教育再生加速プログラム テーマⅢ(高大接続)」平成26年度採択
日英中トライリンガル育成のための高大接続

平成30年度 事業報告書

発行日 令和元年7月

編集発行 杏林大学 高大接続推進室

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀5-4-1

TEL 0422-47-8000 FAX 0422-47-8056

<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/trilingual/>
